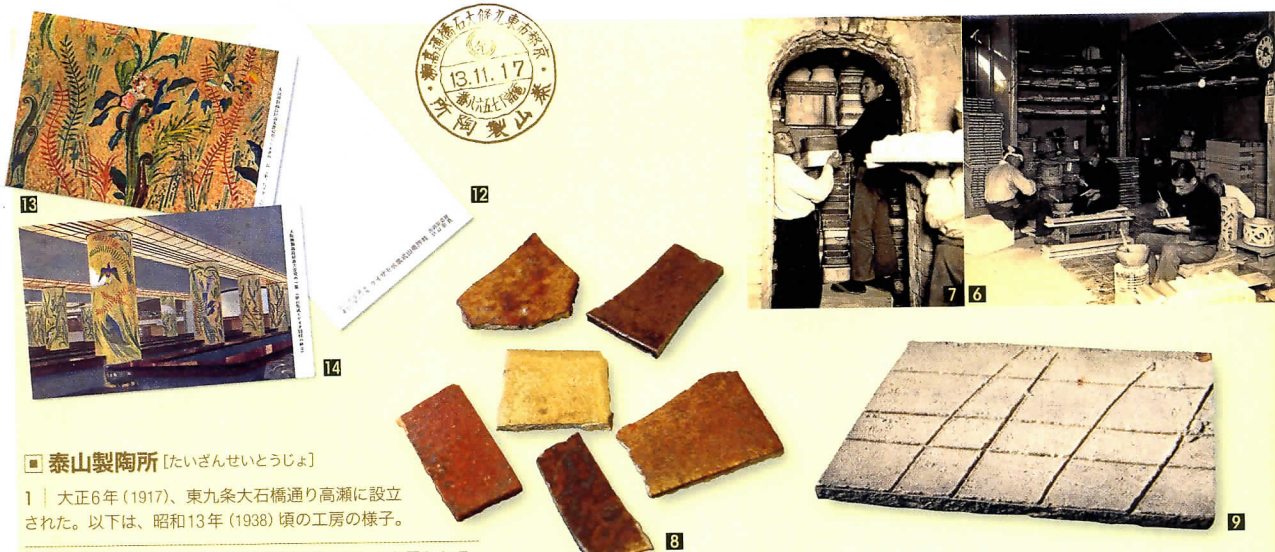


れて焼いたもので、こうしておけばきれいに割りやすい。タイルでモザイク画をつくる様々なノウハウを持っていたようだ。

同社は、秩父宮邸だけでなく宮内省からの仕事を数多く請け負っていた。その流れを考えれば、帝室博物館休憩室のモザイクタイルは、同社が製作したと考えてほぼ間違いのないのではないか。記録に残っていないのが、むしろその証拠であるようにも思う。屋根瓦などと違って、全体からみればほんのわずかのタイル量であり、瓦の納入業者であり兼ねてつきあってもあった泰山製陶所から、「ついでに」納めさせたのではないだろうか。ついで、と言っては言葉が悪いが、雪野は秩父宮邸の担当者でもあったから、同社がどんなタイルを焼いているか、その仕事ぶりにはよく知っていただろう。こんなタイルを持ってきた欲しいと発注することは、容易にできたはずだ。

そう考えていくと、実施設計の段階で雪野が任されてデザインしたであろうあの壁は、仕上げ方についても現場の意見なども取り入れていたかもしれない。びつしりとタイルで埋め尽くさなかったのは「ローコストの目的もあったのかも」と指摘したのは藤森さんだ。そんな事情もあったと考えることもできるし、だからこそ池田泰山と少し遊びの要素も入れた仕上げを試みてみたのかもしれない。

いずれにしてもあの部屋のデザインを考えることは、雪野にとって楽しい仕事だったに違いない。硬質な博物館のなかであって、あの部屋だけが異質に



■ 泰山製陶所 [たいざんせいとうじょ]

1 | 大正6年(1917)、東九条大石橋通り高瀬に設立された。以下は、昭和13年(1938)頃の工房の様子。

2 | 図案部。集成モザイクの完成図を描いていると思われる。

3 | 調土部。

4 | 成形部。石膏型に土を詰め、タイルを起こしている。

5 | 乾燥場。

6 | 釉薬部。一枚一枚釉薬を塗る様子。後方の桶には「辰砂」「水色」などの釉薬が入っている。

7 | 焼成部の窯詰作業。

8 | 昭和十年代と思われる、集成モザイクに使われたタイル。

9 | 成形後、生の状態のとき裏面に、ヘラなどで筋目を入れる。割ると、菱形のような少し歪んだ四角ができる。

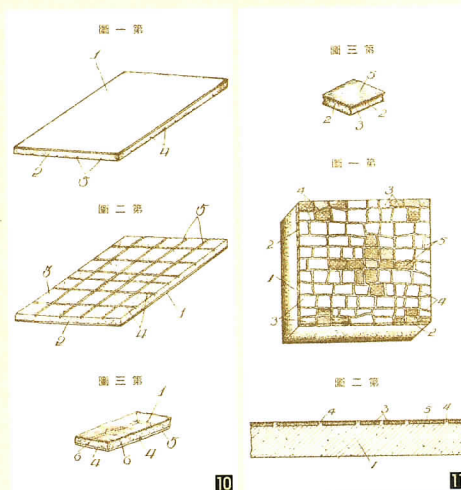
10 | 實用新案出願公告第一五〇六號の「モザイク」用陶板。「…切割線(4)(5)ニヨリテ容易ニ大小任意ノ形状ニ分割シ得ルト共ニ該切割線(4)(5)ニヨリ割目(6)ハ不規則ナル凸凹ノ粗面ヲ形成スルモノナルヲ…」と性質と作用が説明されている。

11 | 實用新案出願公告第三〇四九號の集成「タイル」。

12 | ポストカードの表面。「建築裝飾用 最新材料 特許泰山式集成モザイク 窯業藝術の粋 永久不變の壁畫」

13 | 昭和12年(1937)頃のポストカード。「大阪南海高島屋新大食堂用モザイクの一部(十二尺×十三尺)」

14 | 「大阪南海高島屋新大食堂の一部(泰山集成モザイク圓柱の林立)」と記されている。



感じられるのは、おそらくそんな「楽しさ」が滲んでいるからだ。
佳境を迎えた現場のなかで、京都から届いた美しいタイルの破片を手に、職人にあれこれと指示を出す雪野のいきいきとした姿が、目に浮かぶようだ。